

# 狙撃について

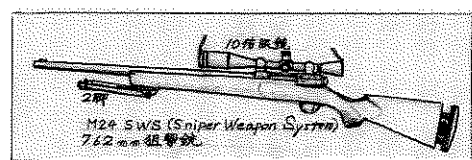
柴田 幹雄 陸自75

陸自は平成24年からオーストラリアで実施されているAASAMという16カ国ほどの国が参加する小銃、機関銃、狙撃銃、拳銃の射撃競技会に毎年出場している。最近の参加国は、開催国オーストラリアの他、東南アジア諸国、欧州、米国、カナダそして日本などである。

近年、陸自チームは陸自富士学校で選抜者に対して集合教育を行って参加させることもあり、大変良い成績を収めている。3年前の大会では狙撃の部で第1射群の射手として出場した陸自選手が射距離1000mの的に、初発を命中させ、射場に静かなどよめきが上がったという。他国の狙撃手にはブルッシャーだったろう。

使用している銃は10倍狙撃眼鏡付きのレミントンM24狙撃銃である。その年の陸自チームは、狙撃の部はもちろぬ優勝、他の種目もよい成績で総合2位になった。陸自は毎年上位の成績を収めており、陸自隊員の射撃能力が高いことを国際的に知らせることは当然抑止力の強化につながる。各国チームの狙撃銃はかなりの国が

レミントンM700もしくはその派生モデルであるM24を使用しているようだ。次いで多いのはイギリス製のL96A1で、ステアーSSSG69を使用しているチームも複数ある。これらすべてで7・62mm弾を使用し、ボルトアクションで、一発撃つごとにボルト(遊底)を操作して排莖・装填を行うタイプである。ただ米国製のS7PVARと思われる銃を狙撃競技で使用しているチームもあった。これは箱型弾倉を使用する半自動銃で、口径は7・62mmである。



一般に狙撃銃は、照準用の眼鏡を装着して使用することが多い。基本的に眼鏡は接眼レンズ、対物レンズ及び中

間の正立レンズからなり、これに照準のためのレティクルが組み合わされており、一般には接眼レンズ側にレティクルがある。レティクルを動かして照準の修正を行うため、眼鏡鏡筒中央付近の右側に、風の影響による弾道の変化の左右修正するウインデージノブがある。鏡胴上面に弾道の垂直方向を修正するエレベーションノブがあり、左側には射手の視力に応ずるパララックスノブがある。軍用の狙撃眼鏡の倍率は長距離狙撃には高倍率が有利であるが、視野が狭くなり視界から目標を一度失うと再照準に不便であり、倍率が高ければ良いというものではない。

各国では現在陸自も使用している10倍固定倍率の他、25倍までの可変倍率のものも多用されている。狙撃用眼鏡のもう一つの大きな特徴は、目標とレティクルの両方に目の焦点が合うことである。照星(フロントサイト)・照門(リアサイト)で照準する場合は目の焦点は照星に合わせるため目標はぼける。従って照準を合わせるのには遠距離になればなるほど難しい。眼鏡を使用する大きな利点である。狙撃射手は、眼鏡を通して、陽炎のような風による空気の揺らぎを見て、経験値から横風を判定するという。また10倍くらいの眼鏡であれば、普通弾で射撃しても弾頭が作る空気の渦で弾

道が見え、照準点の修正ができる。筆者は現職の頃、10倍眼鏡付きM24狙撃銃で600mの鉄的に射撃したことがある。弾道が見えることもあり、スポッターの指示に従って照準点を修正し4発目から命中したことを記憶している。射距離600mだと弾丸が標的に到達するのに約0・7秒かかり、かなりの放物線を描いて飛んでいく。命中すると暫くして「カン」という鉄的の音が来る。このくらいの距離だと、当たったというより当たったという感じである。

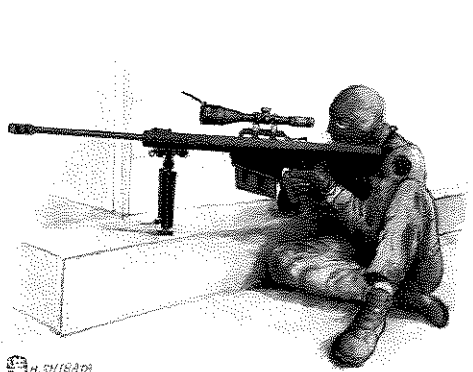
映画などで、狙撃手が射撃現場で銃を組み立て、眼鏡を取り付け射撃するシーンがある。実際は弾着点が照準器の中心になるよう試射による零点規制をするはずで、これをせずに初発で命中させることは極めて難しいと思う。軍団・師団レベルで高度な技術を持つ狙撃手を運用する場合は、作戦の帰趨に影響を与えるような重要対象を狙撃目標にする。通常2〜3名で狙撃チームを編成し敵勢力圏内に潜入させて敵後方で活動することも多い。味方圏内での作戦ではないから、目標への緊迫、狙撃後の離脱も考慮しなければならず、狙撃機会は限定され、射撃距離も600mもしくはそれ以上先の重要目標に対する一発必中が必要になる。このような任務には機構が単純で信頼

性の高いボルトアクションの銃が適しているといえる。

ボルトアクション狙撃銃はボルト操作をする際照準点を維持できず、次弾を撃つのに時間がかかる。その点半自動銃は1発目を撃って直ちに2発目を撃てる。ただ半自動機能を持つと発射

の際の次弾装填を円滑に行うため薬室など機構の間隙に余裕を持たせ、構造も複雑になり命中率が下がる欠点がある。しかし、中隊クラスの指定射手などでは、第一線の戦闘地域での監視、狙撃任務で射距離も500m程度もしくはそれ以下が多いだろう。敵による撃ち返しも予想され、半自動の狙撃銃のほうが実用性は高いと思われる。戦闘地域では敵味方とも指揮官や通信手が狙われることが多く、米軍では第一線での敬礼を省略し、階級章を目立たなくするなどの狙撃対策も取られた。戦闘地域における狙撃は相手の活動を抑制し、士気を低下させる。シリアなどでの戦闘では市街地に進入した戦車の車長がハッチから顔を出しているところを狙撃されるケースも多かった。

狙撃には伝統を持つロシア軍も半自動のドラグノフ狙撃銃を多用しており、米国もM24の他にM16の7・62mmバージョンともいえるM110狙撃銃も近年導入している。銃身はフローティングバレルである。



陸自には半自動の狙撃銃はない。中隊クラスの指定射手いわゆるマークスマンには、これに適した半自動の7・62mm狙撃銃の装備があるとさらに陸自の戦力も向上するだろう。ぜひ次世代の半自動狙撃銃も開発してほしいものだ。

以上述べてきた銃はあえて区分すれば対人狙撃銃に区分される。軍用では口径は7・62mmクラスのものが多い。警察の狙撃手は射距離が100m〜200mが多いとされ、89式小銃と同じ5・56mmのものもある。コミックで有名なゴルゴ13はM16のカスタムモデルを愛用している。初速は早い弾頭重量が軽く、空気抵抗で弾速が落ちるか

ら長距離狙撃には向いていない。あくまでフィクションという事だろう。

一方12・7mmの対物狙撃銃も存在する。フォークランド紛争でアルゼンチン軍が12・7mmブローニング重機関銃に照準眼鏡を付けて単発射撃による長距離の狙撃を行った。英国軍歩兵にとつて大変な脅威となったが、対抗策がなく、携帯式対戦車ミサイルを撃ち込むしかなかった。その戦訓から各国

で12・7mm狙撃銃が開発された。もつとも有名なのはバレットM82で、箱型弾倉使用の半自動狙撃銃である。またボルトアクションの単発式のバレッジンもあるが、有効射程は1000mから2000mと言われている。バレットはもともと地雷、即製爆弾(IED)を狙って破壊するということを製造会社売り込んだため対物狙撃銃と呼ばれている。もちろん対人狙撃にも使われている。挿絵は、右側の壁を利用して左でバレットを構えているイタリア警察軍の射手である。

米海兵隊はバレットを装備した狙撃手と観測用眼鏡を持つ観測手(スポッター)の2名で編成したスカウトスナイパーチームを運用している。このチームは敵後方に進出し、偵察・監視・狙撃を行う。また火砲やミサイルの誘導も行う。海兵隊将校の話では、バレットは射手の能力にもよるが約15

00mは有効射程と考えているとのこと。12・7mm弾には普通弾のほか徹甲弾、焼夷弾などもある。非装甲の車両、レーダー、通信機用のシールド、燃料集積所などはよい目標である。もし

自軍の後方、兵站施設や後方連絡線の1500m以内に敵の狙撃チームが存在し、毎日損害が出るようであれば必ず狙撃手狩りをしなければ兵站活動の効率性は極めて低下する。まさに1個狙撃チームが師団・方面の作戦の成否に影響を与えるほどの脅威となる。

長距離狙撃の記録は、カナダ軍の特殊部隊隊員がISISの戦闘員を口径12・7mmのTAC50ライフルで射距離3540mで倒したのが最長記録とされている。TAC50で撃った弾丸の初速は秒速約840mだから3540mの射距離だと弾の飛行秒時は4秒ほどである。それを考えるだけでも3000m超えの狙撃での命中など想像を絶する世界である。だが見方を変えれば、戦場ではいかなる場所であろうと狙われる可能性があることを認識しなければならぬ。

ドローンで監視され、1000m以上離れたところから狙撃される。指揮官は指揮所の外で歯磨きもできない。現代戦と言えども、種子島以来の脅威も決して無視することはできない。